

研究テーマ

ふるさとに誇りがもてる世代間の
交流促進について

< 提言書 >



令和8年3月

瑞浪市社会教育委員会

はじめに

瑞浪市社会教育委員会代表 加藤 一哉

以前、私が小中学校に勤務していた頃、年度当初の PTA 総会の席で校長として毎年言っていた言葉があります。それは、「PTCA で子供を大人に育てましょう」ということです。

行先不透明で、これからの激動の時代を生きていく子供を育てるには、学校だけで成し得ることは到底できません。勿論、家庭だけでも地域だけでもできません。学校・家庭・地域が心をひとつにして子供を育てていくことです。その意味を表す言葉として「PTA」ではなく「PTCA」としました。「PTCA」とは P:Parent T:Teacher C:Community A:Association の略です。

次に大人に育てるとはどういうことかを話します。私は、激動の時代を生き抜いていくためには、次の 5 つの力が備わっていることだと思えます。

I ルールや約束を守る力

人が人として社会生活を営む上で絶対必要条件です。

II 相手の話を最後まで聴く力

人それぞれ顔形が異なるよう考え方も違います。その相手の考えを先ずは聴くことが大切です。

III 自分の考えを相手に伝える力

相手の考えを聴くだけでなく、自分の考えを持ち、相手に理解してもらえるように伝えることが大切です。

IV 折り合いをつける力

相手の考えと自分の考えは、当然異なります。そこで、お互いの考えを出し合い妥協点を見出すことが重要です。世の中の大人を見渡しても、なかなか妥協することができず、喧嘩や争いに、いや戦争へと発展する可能性すらあります。折り合いをつけることは、幸せ・平和への道でもあると思います。

V 相手を恨まない力

相手の考えと自分の考えと異なり、折角、妥協点を見い出しても、相手を恨んでは元も子もありません。自分の考えと異なる人とも協働していくことが大切です。

どの子たちにもこの 5 つの力をつけるために、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を果たしながら、学校の教育力・家庭の教育力・地域の教育力を結集することが子供たちの真の幸せにつながっていくのではないのでしょうか。

今回、本市社会教育委員会が、研究テーマ『ふるさとに誇りがもてる世代間の交流促進について』に基づき、調査研究してきた成果として、ここに提言させていただきます。

そのことが、本市の学校・家庭・地域にとって一層の活力を生み、本市の宝である子供たちの幸せな未来につながっていくことを心から祈念し、巻頭のご挨拶とします。

【研究テーマ】

ふるさとに誇りがもてる世代間の交流促進について

I 研究テーマを設定した理由

令和6年度より瑞浪市内全小中学校に学校運営協議会が設置された。これによりコミュニティ・スクール（CS）がスタートし、地域学校協働活動との一体的推進が求められるようになった。

各地域での地域学校協働活動は、それぞれのまちづくり推進協議会や区長会、あるいは協力関係にある組織が基盤となり、地域の小中学校との連携を深め、推進されている。この活動では、今まで行ってきた活動を生かしながら、地域特有の歴史文化や伝統芸能、地域イベントへの参画、ボランティア活動、登下校時の見守りや環境美化活動等、地域の特色を生かした協働活動が推進されてきている。

こうした活動の根底にあるのが、地域への愛着や誇りであり、学校教育や社会教育、家庭教育などを通して、脈々と受け継がれてきた良さである。

その一方で、活動を進めていくことで課題も明らかになってきた。中でも、少子高齢化、児童生徒の減少、担い手の高齢化と後継者不足という課題は、年々大きくなってきている。現在、地域での活動の中心世代は祖父母世代（シニア世代）と孫世代によるところが大きい。シニア世代が子供たちに与える影響（ふるさとへの愛着など）は大きい。だからこそ、次のシニア世代へ活動の良さをつなげていくことも大切なことである。

このような実態は本市だけでなく全国的な課題でもあり、少子高齢化や後継者不足については社会教育の範疇で改善していくことには難しさもある。現状を踏まえながらも、可能な範囲で改善することにより、継続しやすい方法を探ることが必要である。

また、学校現場では、教育課程の中で計画的・系統的な取組を目指していきたい一方で、地域からの期待や要望を受けて活動を増やしていくことへの負担感もある。このような課題やズレを互いに共有しながら、目指す子供の姿を具現するための手立てを明らかにしていくことを求めている。

そこで、今年度の社会教育委員会では「ふるさとに誇りがもてる世代間の交流促進について」を研究テーマに掲げた。本テーマを具現するために、多くの方が交流し、持続可能な取組となるように研究を重ねていきたいと考えている。

調査研究では、以下の4点に配慮した提言となることを目指す。

- (1) アンケートから得たアイデアや成果を一般化する。
- (2) 現状を踏まえながらも、可能な範囲で継続しやすい方法を探る。
- (3) 学校や地域の困り感やズレを共有し、持続可能な取組を目指す。
- (4) 子供たちの成長と地域への愛着など真に目指すべき姿を共有し、課題を改善できる方法が示せる提言を目指す。

Ⅱ 社会教育委員会アンケートについて

1 アンケートのねらい

調査研究テーマを「ふるさとに誇りがもてる世代間の交流促進について」とし、アンケートにより、学校運営協議会、地域学校協働活動の現状を分析し、今後の活動が充実していくような提言ができることを目指す。

2 アンケートの対象について

アンケートでは「地域学校協働活動の中で」の質問とした。これは「地域学校協働活動」のとらえを「子供の成長のために学校と地域が目標を共有している全ての活動」と考えているからである。ただし、質問の内容が「協議の場」に大きく関わることもあるので、学校運営協議会を加え、地域での授業支援等も含めて、全ての活動を対象としたアンケートとした。

このアンケートの対象者は、小中学校長、公民館長、学校運営協議会会長、まちづくり推進協議会会長、地域学校協働活動推進員とした。

3 アンケート時期

令和7年6月

4 アンケートの実施方法

令和7年度第1回学校運営協議会の折に、各社会教育委員より、校長・公民館長・地域学校協働活動推進員・まちづくり会長へ、アンケートの依頼をした。(二次元コード付紙媒体配付)学校、公民館へはメールでも送信し、データでも事務局へ送付できるようにした。

社会教育委員はアンケートについての質問や相談については随時行い、記述については思いなどを引き出せるように働きかけた。事務局は、アンケート集計結果をまとめ、社会教育委員会で結果と分析の方向を提案した。



【中学生提案イベント～イルミネーション飾り隊の活動～】

社会教育委員会アンケート

質問1	学校運営協議会や地域学校協働活動の中で、目指す子供の姿は共通理解されていると思われませんか。
質問2	地域学校協働活動の中で、目指す子供の姿の共通理解やその具現に向けての取組はどの程度されていると思われませんか。
質問3	地域学校協働活動の中で、各活動のねらいを明確にし、達成できたかなどの振り返りはどの程度されていると思われませんか。
質問4	地域学校協働活動の中で、地域などに活動の内容を紹介し、広めていく広報活動などはどの程度されていると思われませんか。
質問5	地域学校協働活動の中で、主にどの世代間での交流が多いと思われませんか。
質問6	地域学校協働活動の中で、世代間の交流活動などについて大切にしていることや工夫していることはあると思われませんか。
質問7	地域学校協働活動で取り組んできた活動は、子供たちがふるさとに誇り(関心・親しみ・愛着等も含める)をもつことにつながっていると思われませんか。
自由記述	学校運営協議会や地域学校協働活動について感じていることや活動を充実させるためのアイデアなどをお書きください。

*アンケートの回答率は、76.3%であった。(全配付数 38 名中 29 名回答)

Ⅲ 調査結果

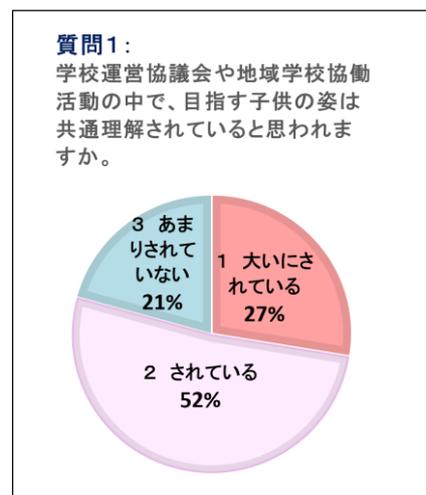
【○:成果 △:課題 ■:考察】

Ⅰ アンケート結果から見えてきた成果 課題と考察

① 目指す子供の姿の共通理解について

- 学校運営協議会や地域学校協働活動の中で、目指す子供の姿の共通理解は、「大いにされている」と「されている」を含めると8割近くある。
- 第1回に開催される学校運営協議会においては、校長からの経営構想の説明によって、共通理解が図られている。
- 地域で子供を育てることを心掛け、公民館などを通して、目指す子供の姿を地域に伝えようとしている地区がある。

△学校運営協議会での説明はあるが、地域学校協働活動では、目指す子供の姿を話題にすることが十分ではない。また、CS委員には理解されていても、地域住民には伝わっていないと感じられる現状がある。



■ 目指す子供の姿は、CS 委員に対して資料を通じて説明がされている。各公民館からも地域に対して目指す子供の姿と具現の方法が広報されている場合もあるが、必ずしもそれを共通理解しているわけではない。目指す子供の姿の共通理解をさらに広めていく必要がある。

② 具現に向けての取組の程度

- 目指す子供の姿の具現に向けての取組は、「大いにされている」と「されている」を含めると8割を超えている。
- 地域に根付いている伝統行事などを通して、子供たちが地域に愛着がもてるようにする取組が継続されている。
- 学校と地域で行う挨拶活動・見守り活動や奉仕作業などを通して、感謝の気持ちや地域に対する理解を深める取組がなされている。
- △ 以前から取組の少ない地域にとっては、どのような取組を行ったらよいか迷いがある。
- △ 前年度踏襲や情報不足などにより、目指す子供の姿の具現よりも、行事を実施することが目的となっている現状がある。

質問2:
地域学校協働活動の中で、目指す子供の姿の共通理解やその具現に向けての取組はどの程度されていると思われますか。

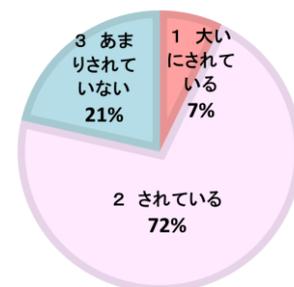


■ 行事が盛んな地域では、子供たちが伝統行事に参加することで、地域への愛着を深める機会も多い。しかし、行事などの参加人数の多さを目的とする傾向もあり、目指す子供の姿を具現するための活動を再検討していく必要がある。

③ 各活動のねらいを明確にし、達成できたかなどの振り返り

- 各活動のねらいを明確にし、達成できたか等の振り返りは、「大いにされている」と「されている」を含めると7割を超えている。
- 地域学校協働活動での各部会において、各活動の振り返りや年間を通してのアンケート調査などにより、次年度への計画に生かされている。
- △ 学校内での取組についてはアンケートを取り、振り返りの結果を発信しているが、地域の活動だと把握ができず実情をつかめていない場合もある。
- △ 活動ごとの評価の観点がないこともあり、各活動の振り返りは、集まった人数が話題となることが多い。

質問3:
地域学校協働活動の中で、各活動のねらいを明確にし、達成できたか等の振り返りはどの程度されていると思われますか。



■ 各活動の振り返りは多くの場合で行われているが、各活動の評価の視点が明確になっているところは少ない。各活動で何を目標として、どう実現していくかなどの具体的な方法を検討する。そのような取組を含めての評価を地域に発信する取組を通して、地域住民に対する活動への関心を高めていく必要がある。

④ 活動内容を紹介し、広めていく広報活動など

- 広報活動などはどの程度されていると思われるかについて、「大いにされている」と「されている」を含めると7割程度の回答がある。
- どの地区や学校でも、公民館便りや学校通信、HPなどを通して、地域の活動や学校のボランティアの様子を紹介する内容が定期的に発信されている。
- まちづくり推進協議会便りをはじめ、マスコミへのPR標語を印刷したのぼり旗やベストなどを活用して広報活動に努めている地区もある。

質問4:

地域学校協働活動の中で、地域などの活動の内容を紹介し、広めていく広報活動などはどの程度されていると思われますか。



△学校通信などでは活動が紹介されているが、地域学校協働活動独自の広報活動は少なく、活動自体を町民に広めるまでには至っていないと感じる場合がある。また、自治会未加入世帯への広報には難しさがあると感じるところがある。

△活動自体の紹介はあるが、地域として子供を育てる意識の高揚や子供と関わっていく態度を育てる広報も大切であるという回答もある。

■活動内容を紹介する広報活動は、通信などの発行を通して、多くの地区でなされている。しかし、広報を発行していても活動内容を町民が周知しているかについては課題も多い。通信以外の様々な手段で広報に努めることで、効果を生み出している。そこで大切になるのは、活動の紹介だけでなく、地域で育てたい子供の姿の共有である。

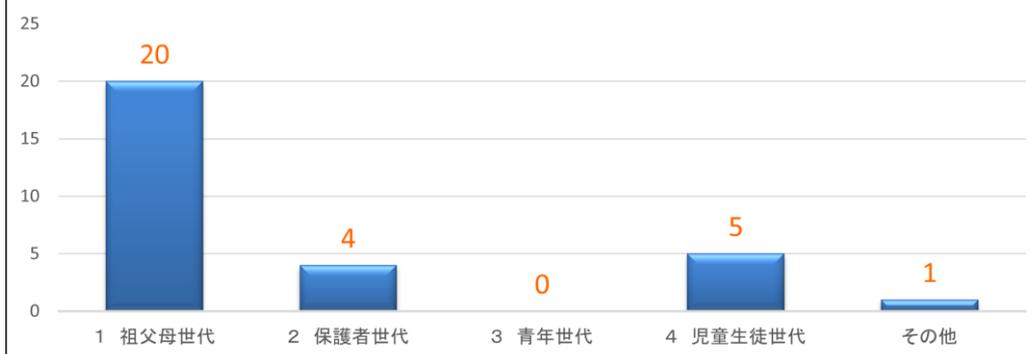
⑤ 世代間での交流の主な世代について

- 地域学校協働活動の中で7割近くが祖父母世代との交流が多いと思われる。
- △保護者世代やその他の世代と子供たちの交流の場はわずかであると感じられている。
- △地域学校協働活動に青年世代が参加していると感じられているところはない。

■人材が高齢化していることが数値としても感じられる。地域の良さを伝えていくために祖父母世代が子供たちと交流していくことは効果的である。しかし、保護者世代が無理なく活動に参加することや、青年世代を意図的に関わらせていくことは、持続可能な活動とするための大きな課題となっている。

質問5:

地域学校協働活動の中で、主にどの世代間での交流が多いと思われますか。



⑥ 世代間の交流活動などについて大切にしていることや工夫していること

○世代間の交流活動で大切にしていることや工夫があると思われるかについて、「大いにある」と「ある」を含めると8割近い回答がある。

○小学校では、草取りボランティアやあいさつ活動などを通して、祖父母世代と児童生徒世代との交流が活発に行われている。

○中学校では、地域のボランティア活動を通して、地域の方とコミュニケーションを取りながら活動することが多く、そのことが活動意欲や郷土愛にもつながり、大切にされている。

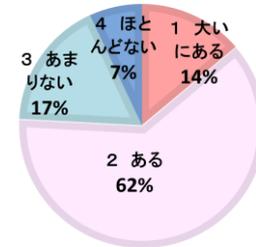
○地域の方の名前が分かるように名札を用意したり、お礼の手紙の中にも名前を入れたりするなど、感謝の気持ちを伝えられるような工夫がある。

○CSと地域学校協働活動を一体化した活動の中で、オブザーバーとして青年世代の参加を位置付け、若い世代の声が反映するような工夫がある。

△世代間交流の時間がない場合がある。あったとしても、PTAなどの限られた方との交流となっている現状がある。

質問6:

地域学校協働活動の中で、世代間の交流活動などについて大切にしていることや工夫していることはあると思われますか。



■地域や学校の活動の中で、児童生徒と地域の方が交流できる多様な場が設けられている。交流の中で互いの名前を意識できる工夫、取組を地域の方に発表する場の工夫、若い世代の意見を反映する仕組みなどの工夫がみられる。活動を通しての自然な触れ合いだけでなく、交流を通して育てていきたい姿を共有することが課題となる。

⑦ 子供たちのふるさとに対する誇りについて

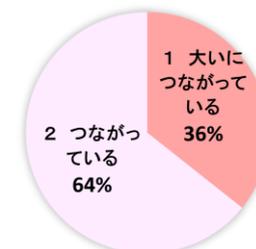
○地域学校協働活動で取り組んできた活動は、子供たちがふるさとに誇りをもつことにつながったかについて、全回答者が「大いにつながっている」か「つながっている」と回答している。

○総合的な学習の時間や地域の方との交流によって、ふるさとに愛着をもつ児童生徒の割合が高いことが学校評価によっても明らかになっている。

○地域の誇りを知る学習や子供と地域住民の思いを伝え合う場を設けるなど、多様な活動の継続によって子供たちの地域への関心は高まっている。

質問7:

地域学校協働活動で取り組んできた活動は、子供たちがふるさとに誇り(関心・親しみ・愛着等も含める)をもつことにつながっていると思われますか。



■地域への愛着を問う児童生徒への学校のアンケート調査では高い割合を示している。また、主張大会や児童生徒の感想からも地域への感謝や愛着が感じられるものが多く、このことはこれまでの取組の成果としてとらえられる。ただし、地域での客観的な調査や「ふるさとへの誇り」に対する指標が明確ではないため、地域での取組と成果との関連が曖昧な部分もある。

⑧ 活動を充実させるためのアイデアなど（アンケートの自由記述から）

- CS は協働することなので、「やってみる・改善する」を共に繰り返しながら、「昨年と同様」を避けていくことで少しずつ良くなると思って活動するとよい。
- 子供たちや学校職員、各団体に対して地域学校協働活動の要望アンケートを取り、次年度に向けた活動計画に盛り込むという方法も考えられる。
- 幅広い年齢層を CS や地域学校協働活動の構成員とするために、20代、30代、40代が参加できる枠を設ける。（例：青少年育成枠・消防団枠・PTA 枠等）
- CS と地域学校協働本部との会議を一元化し、会議の回数を減らし負担をなくす。会議は仕事がある日中ではなく、夜に開催することで保護者世代にとって参加しやすい環境をつくることができる。
- 中学校の活動では、中学校区を一つのふるさとと考えることで、どの小学校区出身の中学生でも幅広い地域への行事やボランティア活動に参加しやすくなることできる。
- ボランティア活動にポイント制度を付与することで、幅広い人材の活躍が期待できる。また、中学校卒業後も地域活動に参加できる仕組みづくりにつげるためにも「まちづくり青年隊」などといった組織を立ち上げ、多世代間のつながりを地域で育てていく方法が考えられる。
- 地域の歴史や文化を語れる人がいるうちに、映像などで記録し、次世代へ伝えていくことで、地域の誇りが受け継がれていく可能性がある。
- 教育委員会として、CS での活動を支える予算の裏付け、各 CS 間の連絡会議の設定等、具体的な動きをつくることでCS をより充実させることができる。
- 各地区の青少年育成町民会議組織を小学校の CS・地域学校協働活動に吸収し、地域の子供たちの育ちを地域で支えるという形に単線化することにより、組織の選択と集中が進み負担軽減と予算獲得のメリットがある。



【伝統文化である地歌舞伎の化粧体験をする子供たち】

IV 提言

1 ふるさとに誇りをもつことのできる地域学校協働活動の在り方

(1) 活動を通して目指す姿の明確化

地域学校協働活動の中で、目指す子供の姿の共通理解は8割近くできている。学校運営協議会では、校長からの経営構想の説明を通して、目指す姿の共通理解が図られている。今後もより多くの地域の方が参加することにより、明確にしていけるようにする。

目指す姿を明確にするためには、**CSなどで地域の声を拾い上げる場を毎年位置付ける**ことが必要である。そこで拾い上げた地域の願いを基に、「地域とともにある学校づくり」の中で明らかにしたい。

目指す姿の明確化は、「学校を核とした地域づくり」の土台ともなる。子供たちの目指す姿を具現していくための地域の在り方を協議することで、活動の目的がより明確になってくる。学校と地域が共有する目的に向かって、それを実現するための連携の仕方・役割の分担・活動ごとの評価などを共通理解しながら、目指す姿の具現につなげていく必要がある。

(2) 学校の教育活動と地域の活動の連携

学校の教育活動に地域が連携している具体例としては、授業や総合的な学習の時間における講師やサポーターの協力がある。また、草取りなどの教育環境整備は、地域住民の参加によって成り立っている。その他にも、挨拶運動や下校見守りなど、学校の教育活動に地域の方の参加はなくてはならないものとなっている。それは、子供たちの地域への関心を高めることにもなり、一層の充実を目指していきたい。

地域の活動に学校（児童生徒）が参加している例としては、中学生のボランティア活動がある。地域の伝統行事や各種イベントには、小学校区以外の中学生のボランティア参加が増えてきており、地域行事の当事者として参加することで地域への愛着や誇りを育むことから、ボランティア活動が持続できるようにしていきたい。

地域学校協働活動の中で、PTA（保護者世代）の参加を求める声は根強い。その一方で、少子化に伴いPTA資源回収や奉仕活動が成立しにくい地域も増えてきている。そこでPTAと地域との連携をさらに進めていきたい。例えば、**PTA行事を地域学校協働活動の中に組み込み、地域の行事として資源回収等を実施する**ことは、双方にとって大きなメリットがある。こうしたことは、世代間の交流を促進していくうえでも良い事例の1つであると考えられる。

PTA活動をCSの一環として、行事ごとに地域学校協働活動との連携を探ることが必要となってくる。そうした連携が多世代間の交流を生み、子供たちの地域への愛着を育み、世代をつないだ持続可能な活動となることを期待する。

(3) 児童生徒を地域の一員として位置付けた交流の場

児童生徒に、地域の一員としての役割や責任をもたせていくことが重要である。そのためには、地域と学校が一体となって子供を育てる「**地域とともにある学校づくり**」を推進していく必要がある。地域の一員としての自覚は、子供たちにとって「学習意欲の向上」、「地域への理解」、「ふるさとへの愛着」などの効果が考えられる。こうした効果は、子供たちが地域との接点を持ち、多様な人たちとつながりながら学んでいくことにより得られる。

大切なことは、子供たちが興味に応じて地域の活動に参加し、子供自身に考える機会があることである。子供たちが自分の活動によって、「誰かのためになった」などの気付きを得る体験が、地域の一員としての自覚につながっていく。

中学生のボランティア活動は、地域の担い手としての期待も大きい。そこで大切にしたいのは、目指す姿の再確認である。地域での中学生の活躍によって、本人の成長や地域の一員としての自覚（愛着）を高めていくことを目指したい。

加えて、**子供たちからの発信の場を設けることも1つの方法である**。発達段階に沿って、**小学生による活動報告会（こどもサミットなど）**や、**中学生による地域活性化（中学生提案イベントなど）**への取組等、地域の一員としての思いをもって活躍ができるようにしていきたい。



【あいさつで笑顔いっぱい運動】



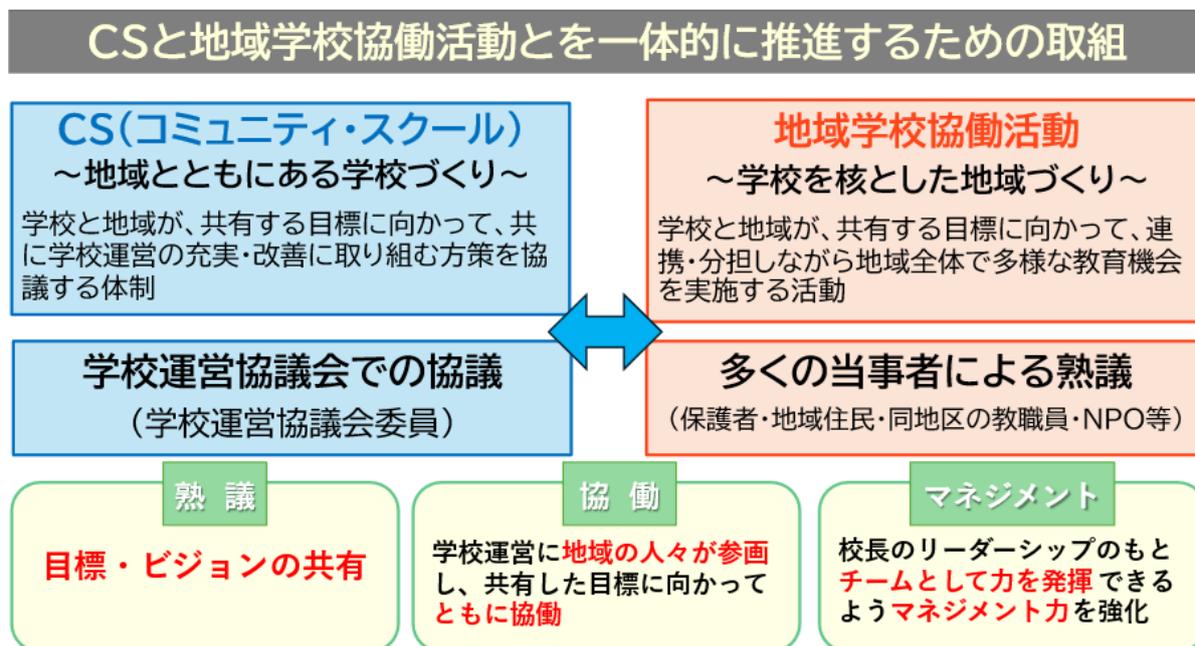
【地元のイベントを盛り上げる中学生】



【町文化祭で活躍するボランティア】

2 多世代間のつながりと持続可能な活動に向けて

(1) 機能的な組織と負担の軽減



上の図は、CSと地域学校協働活動とを一体的に推進するための取組を表したものであり、「車の両輪」のような関係であることが望ましいとされている。

しかし、市内の現状としては、学校運営協議会とは別組織で地域学校協働本部を立ち上げられるだけの人的・予算的な余裕はない。そのために学校運営協議会が地域学校協働本部を兼ねており、担当者の負担感もある。

そこで考えられる改善案としては、学校運営協議会が地域学校協働本部を兼ねながらも **CSの組織(学校運営協議会)に地域学校協働活動のメンバーを取り入れていくこと**である。ある地域ではCSの本会議以外にも拡大会議(CSメンバー以外の参加)を設けているように、部会ごとに臨時でメンバーを招集したりする方法も考えていきたい。

例えばメンバーとして、地域での活動の中心となる地域の代表者、まちづくり関係者、PTAなどの保護者世代、学校職員、青少年育成関係者、青年会議所メンバーなど、**多世代の人材を招集すること**で、特定の人物に負担が偏ることなく、持続可能で魅力ある活動につなげることができる。

また、多世代が集まる会議では、負担を軽減するためにも日中の会議だけでなく夜間も含めた集まりやすい時間帯に会議を設けることも配慮していきたい。

(2) 多世代の地域住民が参画できる活動の工夫

多世代の地域住民が参加する地域学校協働活動として次の例が挙げられる。

- 学習支援（総合的な学習の時間などの講師、教科での授業支援、読み聞かせ）
- 地域行事（伝統行事、文化祭、交流イベント、ボランティア活動）
- 学校行事（環境整備活動、資源回収、運動会、学習発表会、挨拶運動）
- 安全・防災（学校と地域の合同防災訓練、安全教室、通学路点検・見守り）

地域学校協働活動では、多世代の住民が参加することで子供が多様な価値観に触れ、社会性を育む機会が得られる。また、地域住民にとっても活動への参加が地域参画のきっかけとなり、地域活性化にもつながる。

しかし、市内の現状として祖父母世代と児童生徒世代の交流が主であり、保護者世代や青年世代などとの交流は多くはない。保護者世代の参画を促す方法としては、**地域学校協働活動の一環として学校行事に参画していく**ことも必要である。例えば、授業日に学校地域交流行事（ふれあい広場など）を学校と地域で共催することにより、児童生徒世代、保護者世代、祖父母世代の交流の場をつくることのできる。

青年世代については、自主的な参加だけに頼るのではなく、活動スタッフとして組み込んでいくことも必要である。例えば、ある地域のように青年世代を組織に位置付ける、アドバイザーとしての参加を求める、講師としての役割をもつ、ボランティアとして参加を促すことなどが考えられる。

このように意図的な参加の仕組みをつくることを通して、多世代の地域住民が継続した交流ができるようにしていくことが必要である。

（3）つながりを深める交流の在り方

地域と学校が、対等なパートナーとして共に課題に取り組む双方向の関係を前提とした「つながり」を目指していきたい。また、より幅広い世代の地域住民や団体が参画し、目標を共有した**「緩やかなネットワーク」**を形成していくことで、地域の人的・物的資源を生かした多様な活動が可能となり、教育力の向上や持続可能な地域社会の実現につなげていくことが期待できる。

地域のネットワークを整備するうえで、次の3つの要素が大切である。

- コーディネート機能（推進員などによる地域住民と学校をつなぐ役割の充実）
- 多様な活動（多くの地域住民が参画、幅広い種類の地域学校協働活動を実施）
- 継続的な活動（安定的・継続的実施の仕組み、活動の統合化・ネットワーク化）

地域学校協働活動において協働する目的は、「つながりをもつ」ことでもある。活動を通して、どのような交流をすれば「つながり」が深められるかの工夫は特に必要である。

例えば、ある小学校では、**地域の方と児童が互いに名前と呼べるような工夫**や、手紙の中に名前を入れたりするなど、互いが身近に感じるつながり方の工夫がある。中学校では、地域のボランティア活動を通して、**地域の方とコミュニケーションを取りながら活動**できる仕組みを工夫して、地域の方や郷土に対する親しみを深めていきたい。

人口規模の小さな(地区公民館がある)地区では、CS と地域学校協働本部が一体となって、地域住民が参加するイベントや行事を通して、各世代が交流する場を設けていく。**交流した様子や振り返りを発表する場を設けたり、広報したりしていくことで、地域のつながりをさらに深められるようにしていきたい。**

人口規模の大きな(地区公民館がない)地区では、日々行われている様々な行事や交流など、全てを CS と地域学校協働本部が把握することは難しい面もある。そこで考えられるのは、**地域で活動をしている各団体であるまちづくり関係者、PTA、青少年育成関係者、青年会議所メンバーなどを緩やかなネットワークでつなぐこと**である。それらを活用して、各地区での様々な活動を SNS などの活用により CS や地域学校協働本部が把握できるような仕組みが必要である。把握した**情報を地域に発信することで、緩やかではあるが地域のネットワーク(つながり)は深まる。**

つながりを深めるために、幅広い人との交流や相手に親しみを感じる交流の在り方を工夫したり、学ぶ機会を設けたりしながら、さらに地域でのつながりを深めていきたい。



【学校で地域の方と春の苗植えを体験】



【農園の苗植え行事で司会をする子供たち】



【地域講師の指導で上達した太鼓を披露】



【教職員と地域住民合同のCS学習会】

おわりに

瑞浪市社会教育委員会副代表 伊藤 孝一

瑞浪市社会教育委員会では小中学校のコミュニティ・スクール（以下CS）化にあたり、その円滑な移行と活動の充実に向け、各校で学校運営協議会が設立される前から、調査・検討し、提言に取り組んできました。本年度は地域学校協働活動の在り方に関わる調査・検討を行うため関係の皆様アンケートのご協力をいただきました。皆様のご協力に感謝申し上げます。

当市においては、文部科学省が取組の両輪とする「学校運営協議会」と「地域学校協働本部」の機能を「学校運営協議会」が担うという立場でCS化を進めています。

「学校と地域が一体となって子供を育てる」という理想に向け、以前の学校評議員会制度からは地域が主体的に取り組む重要性が格段に高くなっています。令和6年度から市内全小中学校に学校運営協議会が設置されましたが、その運営はまだまだ学校主体であり、学校・教員の負担軽減という点では課題が残ったままです。学校が地域の力を積極的に活用し地域が協力するという構図です。

一方で、これまでの各地区の現状として、「まちづくり推進協議会」や公民館、コミュニティが中心となる地域活性化に向けての有意義な活動が活発に行われています。また、その活動の多くが子供達の育みにつながる活動となっています。

こうした本市の学校や地域の子供に関わる活動の様子を一步引いて見てみると、その取組はCSとしての目的を十分満たすだけのものがあるように感じられます。その在り方や視点を見直すことで学校・地域の双方にメリットがある理想に近いCS像ができ上がるように思います。

その移行期として多少の労力が必要なことは否めません。しかし、当市の現状から最優先すべきは、新たな活動や組織を起こす労力ではなく、学校・地域双方の意識の転換、活動組織の枠組みの見直しだと感じます。これまでの提言がそのきっかけになれば幸いです。



【地域学校協働活動推進員の県内研修会にて】

令和7年度 瑞浪市社会教育委員一同

加藤 一哉	伊藤 孝一	小栗 正敏	平尾 巖
板橋 晋司	湯原 定雄	岩島 留美子	安藤 裕子
浅沼 克郎	滝川 直樹		